

女子に就きての所感

南越 雪 堂 生

古代は、女子に學問をなさしむること少なりし故、無智の者多くありたり。されど近來に至り、盛に女子の教育を勧められ、女子も男子と同じく學問することを得ることなれり。是れ偏に明治聖代の恩恵とこそ謂ふべけれ。然るに今日の女子の學問は、兎角根本的の學問、則ち心を治め、身を修むることなごに力を用ふるもの少くして、唯枝葉的の學問、即ち詩歌、文章、音曲、茶の湯、生花なごにのみ、力を用ふるもの多き傾あり。故に當時の女子は、概して、奢侈に流れ、外貌を飾り、氣分のみ高く、髪は洋風を真似び、身には黒紋付の長羽織を翻へし、我こそ女丈夫なれと揚々然

研究 女子に就きての所感

として耻ぢざるものあり、誠に見苦しきことの限りにこそあれ。

余嘗て聞きしことあり、或る豪家に一人の娘あり。或日、主人按摩に身體を揉ませつゝ、言へる様、我娘は、幼き時より琴三味線はいふに及ばず、其他の技藝も、一通り習はせ、その上學問も少々は出来る様になりたるが、最早年頃に及びたれば、相應の家に縁付かせたし云々と、述べければ、按摩は、いと感心しげに口を開き、おひねりも出来ますかと尋ねれば、主人は尖り口上にて、憚りながら、此家にては、按摩の稽古は不用なりと答へたり。此時按摩は、冷笑して、語をつぎ、如何なる豪家の嫁にても、舅姑なごに、病み煩ひのありたる時は、背腹を撫で充分に看護すべきが、女の道には非ずやと言へば、主人もこれには閉口したりきといふ。

世には、かゝる不心得の親達や、又足袋のつぎさへ、碌に出来ぬ女子を往々見受けることあり、此等はいとも嘆かはしきこともなり。

凡そ女子の學問とは、所謂読み書き算盤なごにのみ止らず、根本的の學問によく心を用ひ、和順なる徳性を養ひ、而して枝葉的の學問に取り掛るべきも、先づ日常女子に必要な裁縫のこと、洗濯の仕方、按摩の稽古、又料理の法なごをも心得置くべきこと肝要なり。若しこれ等の事に疎くば、假令、如何に學問に通達せりとも、女子の務には缺けたりとやいはん。世の女子たるもの、深く我身を顧み、人の毀を招かぬやう慎むべきことなり。

讀者幸に文の拙劣を咎めず參考の資に供するを得ば幸甚。

盛岡地方の手毬歌、お手玉歌(承前)

盛岡 山村 材美

一、せんだいの、せんだいの、あまが娘は善い娘、赤地の小袖に茶の袖、裾をまいたり、着流して、しよなら、しならど行く所、親は見てさい、善いと見る、まして他人は唯惚れべ、たいもはれらば晚御座れ、晩の枕は、何枕、東枕に窓の下、戸の下から、そろりそろりと、手を延べて、此處は名代の金處、たいさまめかて、何に積む舟につひ、舟は沈んでなるならば、脇差刀は、おどつあんえ(父え)葛籠三ツはおかさあんえ(母え)化粧道具は姉さんえ、おらが姉さん、面も洗す、髪も結はず椿油で、せうろせうろ、一ちようし。

一、おん正、正、正、正月で松立つて竹立つて旦那の嫌いな大三十日、一夜明れば元日で年始の御祝儀申しませう、小僧や小僧や、お茶持て来い、吸物なんぞも早